

平和な世界築くため



仏のみ教えと平和への決意を全国に響かせ届けたいという願いのもと「平和の鐘」が撞かれた

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

毎年9月18日、恒例法要として東京で

戦争という人類にとって痛ましい歴史を振り返り、その犠牲となつた全ての人に思いを寄せ、国籍や思想、信条を超えて戦争への道を歩まない決意を新たにすため、1981年から毎年9月18日、宗門は恒例法要として国立「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」(東京都千代田区三番町)で全戦没者追悼法要を営んでいる。同墓苑は、先の大戦で命を失った全ての人々の死を悼み、平和へ

の思いを新たにすると要では、専らご門主がいう国民の願いによって設けられた。第1回法要で即如ご門主(当時)は、人間として生まれ、現に生かされてる者の務めとして「単に、この世の繁栄と幸福、あるいは福祉の向上のみにとどまるものではないでしょう。私たちは、戦没者の方がたの思いに心えるにとどまらず、戦争とは何か、そして平和とは何かを、常に問い直し、未来を担う次の世代へ、平和を守り伝えていく義務と責任があると思います」と述べられている。

昨年9月の第34回法要では、専らご門主が「人間の自己中心性として設けられた。第1回法要で即如ご門主(当時)は、人間として生まれ、現に生かされてる者の務めとして「単に、この世の繁栄と幸福、あるいは福祉の向上のみにとどまるものではないでしょう。私たちは、戦没者の方がたの思いに心えるにとどまらず、戦争とは何か、そして平和とは何かを、常に問い直し、未来を担う次の世代へ、平和を守り伝えていく義務と責任があると思います」と述べられている。

昨年9月の第34回法要では、専らご門主が「人間の自己中心性として設けられた。第1回法要で即如ご門主(当時)は、人間として生まれ、現に生かされてる者の務めとして「単に、この世の繁栄と幸福、あるいは福祉の向上のみにとどまるものではないでしょう。私たちは、戦没者の方がたの思いに心えるにとどまらず、戦争とは何か、そして平和とは何かを、常に問い直し、未来を担う次の世代へ、平和を守り伝えていく義務と責任があると思います」と述べられている。

昨年9月の第34回法要では、専らご門主が「人間の自己中心性として設けられた。第1回法要で即如ご門主(当時)は、人間として生まれ、現に生かされてる者の務めとして「単に、この世の繁栄と幸福、あるいは福祉の向上のみにとどまるものではないでしょう。私たちは、戦没者の方がたの思いに心えるにとどまらず、戦争とは何か、そして平和とは何かを、常に問い直し、未来を担う次の世代へ、平和を守り伝えていく義務と責任があると思います」と述べられている。

「命が奪われることの悲惨さを二度と繰り返してはなりません。このうえは阿弥陀如来の智慧と慈悲を仰ぎつつ、平和な世界を築くために力を尽くしたい」と思っています」と表白で決意を述べられ、石上智康(いわがみ ともやす)総長が「互いに排他的な憎しみの心を克服し、尊い命を奪い合うという愚かな争いをこの地球上からなくすことこそ、私たちすべてが共有すべき目標」と平和宣言した。